



建学の精神

九州ルーテル学院の標語 「感恩奉仕」

これは、神の豊かな恵みを感謝して、愛と奉仕に生きることを表わしています。

学院の聖句

「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」

(ヨハネによる福音書 10 章 10 節)



九州ルーテル学院 校章・マーク
三角は、三位一体の神とともに、知育・徳育・体育を表わし、中心の赤い丸は、学院の教育の中心である霊育を表わしています。バラはルター派教会のシンボルである「ルターの紋章」です。

学校法人 九州ルーテル学院

〒860-8520 熊本県熊本市黒髪3-12-16

TEL : 096-343-3111 FAX : 096-343-7003



創立

九州ルーテル学院は、1908年(明治41)アメリカ・ペンシルベニア州インマヌエル・ルーテル教会の女性たちが、「日本に女子の学校を」と願って、アメリカ南部一致ルーテル教会婦人伝道局に託した5ドルを礎としています。前身となる九州女学院は、1926年(大正15)開校しました。

のちに初代院長となるマーサ・B・エカードは、ルーテル教会の最初の女性宣教師として来日し、幼稚園での活動を始めました。1914年(大正3)エカードは保育者となる女性の育成の必要性をアメリカの教会に訴えます。

エカードら女性宣教師とリッパード宣教師夫人は、九州の佐賀、博多、小城などに幼稚園を次々と設立して、幼児教育の分野で開拓的な働きをなしました。また、モード・O・パウラスは社会福祉施設(慈愛園)を設立しました。彼女たちが一様に求めていたのは、日本人女性の働き手でした。九州女学院の設立は、当時の女性宣教師の働きを支える日本人クリスチャン女性、いわゆるバイブルウーマンの養成が、その目的の一つだったのです。

1911年(明治44)熊本における九州学院設立は、女子学校への要望をいっそう高めることになりました。1921年(大正10)の伝道局総会で、ついに日本に女子学校を建設する決議がなされました。1925年(大正14)までには、募金目標の17万5000ドルを大きく上回る25万6182ドルが集まりました。10万人を超える人々が、この募金に参加したといわれています。

熊本の黒髪に購入した1万坪の敷地に、当時の熊本の人が感嘆して見上げるほど、見事な和洋折衷様式の本館などが完成しました。(九州女学院)の出發は、他教派のミッションスクールに比して遅いものでしたが、熊本においては初のプロテスタントの女子校でした。

新しくできる学校が Janice James School と呼ばれたのは、オハイオ州のジェームズ夫妻が8歳で夭折した娘 ジャニス を記念して多額の献金を捧げたことによります。ジャニスは幼いながら日本への伝道を志し、両親は彼女が果たせなかった思いを寄付に込めました。まさに、「私が立てる = 私立」学校の建学の精神を証するエピソードです。

創立の背景と歴史

初代院長となったエカードは、1914年(大正3)M・L・パワースとともに来日し、佐賀幼稚園、南博幼稚園、久留米の幼稚園に勤務しました。

テネシー州で9人兄弟の次女として生まれたエカードは、敬虔な母から「祈ること」「差別しないこと」「使命の大切さ」を学んだといいます。1学年70~100名規模の少数教育を施すマリオン・カレッジで学び、このときの経験が九州女学院に生かされたと考えられます。

当時、ルーテル教会では『TIDINGS(タイディングス)』という月刊誌が発行され、日曜学校と宣教活動の報告が掲載されました。エカードはこの月刊誌を通じて、日本伝道への使命感を培われていきました。

福岡で幼児教育に献身しているときに、熊本に創設される女子学校の初代院長に就任するように指示を受けたエカードは、準備のために帰国して、オハイオ州ウィッテンベルグ大学で教育学修士号を取得しました。

開校準備にあたっては、先輩宣教師である男性のホールン、ウインテルらの協力とともに、日本人助力者の働きも忘れることはできません。ことに主事に就任してエカードの片腕として草創期の労苦とともに担った村上二郎は、院内に住み、キリスト教家庭のモデルを生徒たちに示しました。

村上は、明治学院を卒業後、ルーテル神学校に迎えられて教鞭をとり、九州学院開校時にはアメリカ留学を命じられました。3年後に帰国して九州学院で教鞭をとり、1924年(大正13)には九州女学院開校準備のために再び留学。2年間の修養ののち帰国して、九州女学院の主事に就任しています。

もう一人の助力者は、牧野典次です。牧野は1871年(明治4)生まれで、早稲田大学英文学科を卒業後、青山学院において神学を修め、九州学院神学部で教鞭をとりました。九州女学院開校時には、建築の監督にあたり、また会計面での責任を任されています。

高い理想を掲げ出發した九州女学院は、開校して間もなく困難に直面しました。生徒の激減です。初年度の入学生は70名でしたが、卒業生はわずか34名。原因は学費が高いことと、アメリカ式の厳しい教育方針に熊本の保護者が馴染めなかったこと、また公立学校の普及などによりました。エカードと村上は、日本の土壌に受け入れられる教育への転換を模索しつつ、日夜真剣に祈ったといいます。

この困難を何とか乗り越えた先に、再び困難が待ち受けていました。国家による、キリスト教教育への圧力です。教育勅語、御真影への拝礼の強制など、ミッションスクールとして深刻な危機の時代を迎えることになりました。校名は(清水高等女学校)と改名させられ、本館地下は軍需工場として使われました。1941年(昭和16)エカードはいったん帰国。戦後、再び再建のために戻ってきました。

26歳で来日したエカードは、1955年(昭和30)停年退職まで1年を残して病のために引退し、1969年(昭和44)ワシントンDCの老人ホームで逝去しました。エカードは、療養のために取った1年の休暇と戦争中の5年間を除いて、実に35年間を日本のために献身しました。その内、29年間は九州ルーテル学院のために用いられました。



初代院長 Martha B. Akard (1887~1969年)
主からいただく豊かな命を感謝して分かち合う奉仕こそ、学院の教育の土台であるとしました。

